

美しいひびき、感動にみちた
音楽との出会いをお届けします。



エリック・カール
「うたが みえる きこえるよ」1982年
TM & © 2021 Penguin Random House LLC. All rights reserved.

ROHM
SEMICONDUCTOR

マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会VOL. 2

小林研一郎80歳(傘寿)記念&
チャイコフスキー生誕180周年記念
チャイコフスキー交響曲全曲チクルス

ガラ・コンサート
特別公演プログラム

KOBAKEN MUSIC FESTIVAL 2020



小林研一郎80歳(傘寿)記念&チャイコフスキー生誕180周年記念

チャイコフスキー交響曲全曲チクルス
“KOBAKEN MUSIC FESTIVAL” 2020



Pyotr Ilyich Tchaikovsky
1840 – 1893



Maestro Ken-ichiro Kobayashi
1940 –

マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会 VOL. 2

小林研一郎(傘寿)記念&チャイコフスキー生誕180周年記念

チャイコフスキー交響曲全曲チクルス

ガラ・コンサート

特別公演プログラム

KOBAKEN MUSIC FESTIVAL 2020

指揮：小林研一郎

ピアノ：上原彩子

ヴァイオリン：神尾真由子

管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団

日本フィルハーモニー交響楽団

主催：マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会実行委員会

東海テレビ放送株式会社 (2/24 名古屋公演のみ)

特別協賛：ローム株式会社／株式会社オービック

協賛：株式会社千代田テクノル／株式会社重松製作所／

富士テレコム株式会社／相互整美株式会社

協力：ジャパン・アーツ／日本フィルハーモニー交響楽団／サントリーホール

クラシック名古屋 (名古屋公演)／佐川印刷株式会社

荒井恵理子 (エディター)

マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会 VOL. 2
小林研一郎(傘寿)記念&チャイコフスキー生誕180周年記念

2021年

2月24日(水) 18:45開演 愛知県芸術劇場コンサートホール(名古屋)

【特別公演プログラム】

Wednesday, February 24, 2021 at 18:45 Aichi Prefectural Art Theater Concert Hall, Nagoya

4月7日(水) 19:00開演 サントリーホール 大ホール(東京)

【プログラムA】

Wednesday, April 7, 2021 at 19:00 Suntory Hall, Main Hall

4月13日(火) 19:00開演 サントリーホール 大ホール(東京)

【プログラムB】

Tuesday, April 13, 2021 at 19:00 Suntory Hall, Main Hall

4月27日(火) 19:00開演 サントリーホール 大ホール(東京)

【プログラムC】

Tuesday, April 27, 2021 at 19:00 Suntory Hall, Main Hall

7月13日(火) 19:00開演 サントリーホール 大ホール(東京)

【プログラムD】

Tuesday, July 13, 2021 at 19:00 Suntory Hall, Main Hall

8月30日(月) 19:00開演 サントリーホール 大ホール(東京)

【GALAプログラム】

Monday, August 30, 2021 at 19:00 Suntory Hall, Main Hall

※ザ・シンフォニーホール(大阪)で予定されていた下記2公演は、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、中止となりました。

2020年

3月7日(土)【特別公演プログラム】

4月5日(日)【GALAプログラム】

【特別公演プログラム】

2/24 名古屋

チャイコフスキー

Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

交響曲第4番 ヘ短調 作品36

Symphony No. 4 in F Minor, Op. 36

I. Andante sostenuto – Moderato con anima

II. Andantino in modo di Canzona

III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro

IV. Finale: Allegro con fuoco

«« 休憩 »»
intermission

交響曲第6番 ロ短調 作品74「悲愴」

Symphony No. 6 in B Minor, Op. 74 “Pathétique”

I. Adagio – Allegro non troppo

II. Allegro con grazia

III. Allegro molto vivace

IV. Adagio lamentoso

管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団

Nagoya Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 25、26 ページ)

【プログラム A】

4/7 東京

チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

交響曲第 1 番 ト短調 作品 13「冬の日の幻想」
Symphony No. 1 in G Minor, Op. 13 “Winter Daydreams”

- I. Daydreams on a Winter Journey (冬の旅の幻想) :
Allegro tranquillo
- II. Gloomy land, misty land (荒涼たる土地、霧の土地) :
Adagio cantabile ma non tanto
- III. Scherzo: Allegro scherzando giocoso
- IV. Finale: Andante lugubre – Allegro maestoso

«« 休 憩 »»
intermission

交響曲第 4 番 ヘ短調 作品 36
Symphony No. 4 in F Minor, Op. 36

- I. Andante sostenuto – Moderato con anima
- II. Andantino in modo di Canzona
- III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
- IV. Finale: Allegro con fuoco

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団
Japan Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 24、25 ページ)

【プログラム B】

4/13 東京

チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

交響曲第 2 番 ハ短調 作品 17「小ロシア」
Symphony No. 2 in C Minor, Op. 17 “Little Russian”

- I. Andante sostenuto – Allegro vivo
- II. Andantino marziale, quasi moderato
- III. Scherzo: Allegro molto vivace
- IV. Finale: Moderato assai – Allegro vivo

«« 休 憩 »»
intermission

交響曲第 5 番 ホ短調 作品 64
Symphony No. 5 in E Minor, Op. 64

- I. Andante – Allegro con anima
- II. Andante cantabile con alcuna licenza
- III. Valse: Allegro moderato
- IV. Finale: Andante maestoso – Allegro vivace

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団
Japan Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 24、26 ページ)

【プログラム C】

4/27 東京

チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

交響曲第 3 番 ニ長調 作品 29「ポーランド」
Symphony No. 3 in D Major, Op. 29 “Polish”

- I. Introduzione e Allegro: Moderato assai
(Tempo di Marcia funebre) – Allegro brillante
- II. Alla tedesca: Allegro moderato e semplice
- III. Andante: Andante elegiaco
- IV. Scherzo: Allegro vivo
- V. Finale: Allegro con fuoco (Tempo di Polacca)

«« 休 憩 »»
intermission

交響曲第 6 番 ロ短調 作品 74「悲愴」
Symphony No. 6 in B Minor, Op. 74 “Pathétique”

- I. Adagio – Allegro non troppo
- II. Allegro con grazia
- III. Allegro molto vivace
- IV. Adagio lamentoso – Andante

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団
Japan Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 25、26 ページ)

【プログラム D】

7/13 東京

チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

ピアノ協奏曲第 1 番 変ロ短調 作品 23
Piano Concerto No. 1 in B-flat Minor, Op. 23

- I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
- II. Andantino semplice – Prestissimo – Tempo 1
- III. Allegro con fuoco

ピアノ：上原彩子
Ayako Uehara, Piano

«« 休 憩 »»
intermission

交響曲「マンフレッド」 ロ短調 作品 58
Manfred Symphony in B Minor, Op. 58

- I. Lento lugubre – Moderato con moto – Andante
- II. Vivace con spirito
- III. Andante con moto
- IV. Allegro con fuoco

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団
Japan Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 27 ページ)

【 GALA プログラム 】

8/30 東京

チャイコフスキー
Pyotr Ilyich Tchaikovsky:

オペラ『エフゲニー・オネーギン』より「ポロネーズ」
Polonaise from Opera “Eugene Onegin”, Op. 29

弦楽セレナード ハ長調 作品 48
Serenade in C Major for String Orchestra, Op. 48

- I. Pezzo in forma di sonatina. Andante non troppo – Allegro moderato
- II. Walzer: Moderato. Tempo di Valse
- III. Élégie: Larghetto elegiaco
- IV. Finale (Tema russo): Andante – Allegro con spirito

«休憩»
intermission

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品 35
Violin Concerto in D Major, Op. 35

- I. Allegro moderato—Moderato assai
- II. Canzonetta. Andante
- III. Finale. Allegro vivacissimo

ヴァイオリン：神尾真由子
Mayuko Kamio, Violin

祝典序曲「1812 年」 作品 49
1812 Festival Overture, Op. 49

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団
Japan Philharmonic Orchestra

(プログラム・ノート 28、29 ページ)

【ご来場のお客様へ、感染症対策ご協力をお願い】

■マスクを着用されていない方のご入場はお断りしております。ご鑑賞中も含め、館内では常時マスクで口と鼻を確実に覆っていただきますよう、お願いいたします。

■ホワイエ、ロビー、通路などでは、お客様同士の間隔を十分に保てるよう、ご協力・ご配慮をお願いいたします。

■ご来場の際には、ご同伴者ともに連絡先の記入、連絡先登録にご協力ください。

■客席内、ロビー等での会話はお控えください。また館内での飲食はご遠慮ください。

■「ブラボー」などの掛け声は飛沫感染防止のためご遠慮ください。

■こまめな手洗い、手指消毒、「咳エチケット」の励行をお願いいたします。

■現在、感染予防対策として施設内のクロークを閉鎖している場合があります。
荷物、上着、コート類等をお預かりすることができない場合がございますのでご注意ください。

■終演時の時差退場にご協力をお願いいたします。

■新型コロナウイルス接触確認アプリ等(厚生労働省「新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCOA)」)や各自治体独自の通知アプリもご利用ください。

新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCOA)

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/cocoa_00138.html

【サイン会・プレゼント・アンコールについて】

■出演者への花束・手紙・プレゼント等は、受理いたしかねますのでご遠慮ください。

■サイン会は行いません。楽屋口等での面会も一切行いませんので、お待ちになりませんようお願いします。

■混雑を避けるため、アンコール曲の掲示は行いません。HPにてお知らせいたしますのでご利用ください。

(2021年2月現在)



小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi

東京藝術大学音楽学部作曲科および指揮科を卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。これまでに世界有数の音楽祭に出演するほか、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、アーネム・フィルハーモニー管弦楽団などの日本公演の舵をとり、日本フィルハーモニー交響楽団の海外公演を成功へと導いた。

文化を通じた長年にわたる国際交流や社会貢献により、ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして2020年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を、国内では2011年文化庁長官表彰を受け、2013年秋の叙勲では旭日中綬章が授与された。

作曲家としても数多くの作品を書き、1999年には日本・オランダ交流400年記念の委嘱作品、管弦楽曲『パッサカリア』を作曲、ネーデルランド・フィルで初演されると、聴衆から熱狂的な喝采を以て迎えられた。同作品はそれ以降も様々な機会に再演されている。

2005年からは社会貢献を目的とした「コバケンとその仲間たちオーケストラ」で活動趣旨に賛同するプロ、アマチュア、学生などのボランティアメンバーと共に全国でチャリティ公演も行っている。音楽に対する真摯な姿勢と情熱的な指揮ぶりは「炎のコバケン」の愛称で親しまれ、国内外オーケストラへの客演も多く、名実ともに日本を代表する指揮者である。

CD、DVDはオクタヴィア・レコードより多数リリース。著書に『指揮者のひとりごと』（騎虎書房）などがある。

現在、日本フィルハーモニー交響楽団桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、読売日本交響楽団特別客演指揮者、群馬交響楽団ミュージック・アドバイザー、九州交響楽団名誉客演指揮者、東京藝術大学、及びリスト音楽院名誉教授、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団音楽監督、ローム ミュージック ファンデーション評議員などを務める。指揮者としての活動を中心とした音楽芸術全般において、日本における音楽文化の発展及び国際的発信における功績は顕著であること、加えて教育面での貢献も大きく、音楽人として素晴らしいモデルになっていることから、令和2年度 第77回 恩賜賞・日本芸術院賞を受賞！

オフィシャル・ホームページ：<http://www.it-japan.co.jp/kobaken/>



「21 世紀の今、ベートーヴェンの『第九』を振ってコパケン越える指揮者はいない」という音楽関係者の声をよく聴く。私が初めて彼のことを知ったのは 1977 年、テレビ番組「地球は音楽だ」シリーズの撮影でハンガリーの首都ブダペストを訪れた時のことであった。繁華街をロケハン中、とある楽器店のショーウィンドウに、たたみ 2 畳分もあろうかと思われる彼の巨大なポートレート写真が飾られているのを見て驚天した。クラシック音楽の指揮者がまるでハリウッドの大スターのように扱われているではないか。その頃の私は“コパケン”のことは全く知らず、店の人に尋ねて初めて彼が「日本人」であることを知った。彼が、1974 年の第 1 回ブダペスト国際指揮者コンクールで第 1 位となり、ハンガリー文化勲章を贈られた「英雄」である事を知ったのもその時だった。2003 年地球交響曲第五番の撮影で、アーヴィン・ラズロ博士が設立された世界賢人会議「ブダペストクラブ」のメンバーに、ダライ・ラマ法王やジェーン・グドールと並んで「小林研一郎」が加わっていることも知った。

奇しくも私と 1940 年 4 月の、同年同月生まれである。

私と小林研一郎が出会うということは偶然ではない。はっきり言って言葉では説明のできない同じ事柄がお互いにあり、地球交響曲的な何か、人間にとってはすごく大切なこと、今の時代にやらなくてはならないことがあるのだと確信している、コパケンの仕事を映画にするとかそういうことではない、この時代までの私と彼とがつながりあって生まれる「第九」を私のいのちの最後として送りたいのだ。

龍村仁（映画監督）



炎のコパケンこと小林研一郎マエストロとのご縁は、本当に想像もつかないほど長い。ハンガリーの指揮者コンクールで優勝され、華々しい凱旋を飾られた頃以来だ。

そして私が、一念発起して東京音楽大学声楽科に入学した時に、小林マエストロは指揮科の教授として、大学におられた。

素晴らしい音楽と共に生きた私の人生のシーンのほとんどが、小林マエストロとご一緒だったことを、振り返って本当に幸せなことに感じている。

もう傘寿をお迎えになったのかと驚くのは、マエストロがいつまでも、音楽への若々しい情熱と共に生きておられるからだろう。

これからも、命の限り、炎のタクトを振っていただきたいと念じてやまない。

池田理代子（漫画家／劇画家／声楽家）



コンサートを御一緒に、舞台上でトークをする時の柔和な表情や丁寧な話しぶりとは対照的に、ひとたび指揮台に上がれば、その情熱あふれる音楽にいつも魅了される。

炎のコバケンと人は呼ぶけれど、マエストロの「炎」とは、激しさや勢いの炎じゃない。それは並外れた情念のエネルギーだと思う。ご自身の人生や豊かな経験をもとに人間のあらゆる感情をすくい上げ、ここぞという音楽のツボに惜しみなく注ぎこむ…。すると圧倒される生命力が湧きおこり、会場全体を満たして聴き手の魂まで震わせる響きが生まれる。

これぞマエストロだけの魔術！

とりわけ深い絆で結ばれる日フィルさんとの演奏では、本番が実に楽しみ。リハやゲネプロとも違う、本番一度だけの濃密な音楽空間。そこに身を置く幸せ…。しかもこの度は5日間にわたるチャイコフスキー・プログラムだ。

匠のタクトに導かれて、私達も響きの海をたゆたいながら、生きる喜びを実感しようではありませんか。

朝岡 聡 (フリー・アナウンサー&コンサート・ソムリエ)



小林研一郎さん、このたびは80歳記念のコンサート、まことにおめでとうございます！

今回の5日間にわたる「祝祭演奏会」では、チャイコフスキーの交響曲6作品に「マンフレッド交響曲」、そして「エフゲニー・オネーギン」からヴァイオリン協奏曲、弦楽セレナーデなどによるガラコンサートとうかがい、たいへんな内容に驚いております。

いつも小林さんとは、中学生や高校生にクラシック音楽に親しんでいただくという趣旨で行っている夏休みの「はじめてクラシック」や、大晦日にベートーヴェンの9つの交響曲を1日で演奏してしまおうという「ベートーヴェンは凄い！ 全交響曲連続演奏会」にて、毎年お世話になっております。

お会いするたびに思うのは、“炎のコバケン”として知られるその情熱と、こちらからどんなアイデアを投げかけても受け止めて下さる柔軟さ、そしてつねに全力で音楽に向き合う真摯さです。

これからも素晴らしい音楽を！

三枝成彰 (作曲家)



3歳児のコースからヤマハ音楽教室に、1990年よりヤマハマスタークラスに在籍。ヴェラ・ゴルノスタエヴァ、江口文子、浦壁信二各氏に師事。第3回エトリンゲン国際青少年ピアノコンクールA部門第1位をはじめ多くのコンクールで入賞を果たす。2002年6月には、第12回チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門において、女性としてまた、日本人として史上初めての第一位を獲得。第18回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。

これまでに国内外にて演奏活動を行い、2004年12月にはデュトワ指揮 NHK 交響楽団と共演し、2004年度ベスト・ソリストに選ばれた。CDはEMIクラシックスから3枚がワールドワイドで発売された他、キングレコードより『上原彩子のくるみ割り人形』『ラフマニノフ：13の前奏曲』『上原彩子のモーツァルト&チャイコフスキー』がリリースされている。

2006年1月10日には「日本におけるロシア文化フェスティバル2006」オープニング・ガラコンサートでゲルギエフ指揮マリインスキー歌劇場管弦楽団と共演、また、2008年9-10月にはクリスチャン・ヤルヴィ指揮ウィーン・トーンキュンストラ管弦楽団とのオーストリア及び日本ツアーを行ない、2017年3月には、ベルリン及び日本国内4都市において、エリアフ・インバル指揮ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団と共演、高い評価を受けた。

東京藝術大学音楽学部 早期教育リサーチセンター准教授。

オフィシャル・ホームページ：<https://www.japanarts.co.jp/artist/AyakoUEHARA>



4歳よりヴァイオリンをはじめる。2007年に第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた。ニューヨーク・タイムズ紙でも「聴く者を魅了する若手演奏家」「輝くばかりの才能」と絶賛される。

これまで、国内の主要オーケストラはもとより、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、ロシア・ナショナル・フィルハーモニー交響楽団、ボストン・ポップス・オーケストラ、BBC交響楽団、バイエルン州立歌劇場管弦楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団などと共演。2020年10月に6年ぶりとなる『J. S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ』の新譜を発表。初録音となるバッハ無伴奏パルティータ3曲を、2020年6月コロナ禍の中、東京でも屈指の音響効果を誇る浜離宮朝日ホールにおけるセッションを実施した。

これまで里屋智佳子、小栗まち絵、工藤千博、原田幸一郎、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫、ザハール・ブロン各氏に師事。楽器は宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1731年製作「Rubinoff」を使用している。大阪府知事賞、京都府知事賞、第13回出光音楽賞、文化庁長官表彰、ホテルオークラ音楽賞はじめ数々の賞を受賞。



愛知県名古屋市を中心に、東海地方を代表するオーケストラとして、地域の音楽界をリードし続けている。その革新的な定期演奏会のプログラムや、充実した演奏内容で広く日本中に話題を発信。“名（めい）フィル”の愛称で地元住民からも親しまれ、日本のプロ・オーケストラとして確固たる地位を築いている。

現在の指揮者陣には、音楽監督の小泉和裕をはじめ、小林研一郎（桂冠指揮者）、モーシェ・アツモン（名誉指揮者）、ティエリー・フィッシャー（名誉客演指揮者）、川瀬賢太郎（正指揮者）が名を連ねている。また、2017年より第2代コンポーザー・イン・レジデンスを酒井健治が務めている。

楽団結成は1966年7月。1973年に名古屋市の出捐により財団法人に、2012年に愛知県より認定を受け公益財団法人となる。意欲的な内容に定評のある「定期演奏会」をはじめ、親しみやすい「市民会館名曲シリーズ」や障がいのある方を対象とした「福祉コンサート」など、バラエティに富んだ年間約120回の演奏会を実施している。



1956年6月創立、楽団創設の中心となった渡邊暁雄が初代常任指揮者を務める。2016年に創立60年を迎えた日本フィルは、この歴史と伝統を守りつつ、さらなる発展を目指し、「オーケストラ・コンサート」、「エデュケーション・プログラム」、リージョナル・アクティビティ」という三つの柱で活動を行っている。

桂冠名誉指揮者小林研一郎、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、首席指揮者ピエタリ・インキネン、正指揮者山田和樹という充実した指揮者陣を中心に演奏会を行い、“音楽を通して文化を発信”している。

2011年4月よりボランティア活動「被災地に音楽を」を開始し、2021年1月には300回目を数えるに至っている。40年を超えて続く親子コンサート（夏休みコンサート）、九州全県をめぐる九州公演など、「人に寄り添う」「温かさ」の土壌を大切にしながら、あらゆる人々へ、地域へ、音楽の持つ様々な力を社会に活かしていくことを目指している。

毎週水曜日 22時54分～23時、BS朝日『Welcome クラシック』出演中。

オフィシャル・ウェブサイト <http://www.japanphil.or.jp>

公式 Twitter @Japanphil

チャイコフスキーと交響曲

寺西基之

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が19世紀後半のロシアを代表する作曲家であり、その音楽の魅力がロシア的な民族性にあることは言を俟たない。だが意外なことに生前の彼はロシアで必ずしも民族的な作曲家と見なされてはいなかった。当時はムソルグスキー、ボロディン、リムスキー＝コルサコフらの“力強い仲間たち（五人組）”が民族主義的とされ、チャイコフスキーは西欧派とか折衷派と言われていたのである。

たしかに“力強い仲間たち”がヨーロッパの伝統様式と距離を置きつつ新たな民族的な音楽のあり方を追求したのと比べると、チャイコフスキーのスタイルは、師であるアントン・ルビンシテインが開設したばかりのペテルブルク音楽院で身に付けた西欧のアカデミックな伝統的書法と様式を基盤としているといえよう。形式的にも彼の作品の多くは、ソナタ形式をはじめとする古典的な論理性に基づいており、その点で彼が西欧派と批判されたのも頷ける。ただこうした批判は、民族主義を標榜する“力強い仲間たち”の支持者たちがことさら対立を煽ったことによるところが大きい。実際にはチャイコフスキーと“力強い仲間たち”は常に対立していたわけではなく、互いに批判もすれば評価する点は評価し合うといった、是々非々の立場の関係にあった。

チャイコフスキー自身、西欧派と批判されることに対して、「私とリムスキー＝コルサコフとは一体どこが違うのか。彼も私もオペラを書き交響曲も書いた。彼も私もロシア人であり、私は彼と同様にロシア民族を愛し、ロシア人であることを誇りに思っている」と述べているが、実際、彼がヨーロッパの伝統的な様式のうちに表現しようとしたのはロシア人としての精神性であり民族性であった。ソナタ形式にしても、ロシア的な特徴を持った主題を用い（しばしば民謡そのものを引用している）、展開法もスラヴ的なダイナミズムを重視するというように、民族精神の表現に相応しい仕方で形式を応用している。彼の音楽は、伝統的な様式や形式という確たる器に民族性を注ぎ込んだところに特質がある。

伝統的な様式を基盤としたチャイコフスキーにとって、伝統ジャンルのうちでも最も重みのある交響曲という曲種に取り組むことは大きな意味を持っていたに違いない。交響曲の論理的構造のうちにいかに民族精神を表現するか、交響曲第1番「冬の日の幻想」はその最初の試みであり、ロシア的な旋律主題、終楽章における民衆歌の引用など、伝統様式の中に民族的な特質を織り込もうとする筆遣いに、チャイコフスキーの姿勢が如実に現れている。この第1番の初稿が書かれた1866年の時点で、ロシアにおける本格的な交響曲はアントン・ルビンシテインの作品などまだ僅かしか存在しておらず、チャイコフスキーのこの交響曲第1番は、以後のロシアの民族的な交響曲の歴史の出発点となった作品といっていよう。彼自身、この第1番で確立した交響曲様式、すなわちロシア的な主題を取り入れるなどの方法で民族表現を実現した交響曲のあり方を、続く第2番（ウクライナ民謡の引用）、第3番（スラヴの民俗舞曲の要素の導入）でさらに発展させていく。

こうした初期の3曲の交響曲で確立された民族性の表現の上に、チャイコフスキー自身の人生上の問題や自己の感情など、自伝的な意味合いをオーバーラップさせるという新たな要素が加わってくるのが中期の交響曲第4番である。その方向は、その後かなり間をおいて書かれた後期の交響曲第5番にも引き継がれる。この2曲がいずれも運命との闘いと勝利という構図を持つのに対し、彼にとって最後の交響曲となった第6番「悲愴」は、敢えて伝統的な交響曲様式を逸脱した楽章構成をとってまで、運命への敗北を表現する。第5番までの基盤となっていた伝統様式が最後の交響曲で崩れたことは、それだけ自伝的な意味合い、自己の感情表現に重きが置かれることになったということかもしれない。といってもロシア的な民族精神はこの第6番にも強烈に現れている。

第4番と第5番の間に書かれた交響曲「マンフレッド」は文学作品に基づく交響詩的作品で、他の彼の交響曲とはコンセプトが異なる。チャイコフスキーが敢えてこれに番号を付けなかったのは、こうした物語を描写する交響詩的なスタイルは彼にとってあくまで交響曲の番外だったからと思われ、そこに逆に交響曲という伝統ジャンルへのこだわりが見てとれるともいえよう。

交響曲全曲チクルス

交響曲第1番 ト短調 作品13 「冬の日の幻想」

4/7 東京

チャイコフスキーにとって最初の交響曲となったこの作品は、彼がペテルブルク音楽院を卒業した翌年にあたる1866年、モスクワ音楽院で教え始めた時期に書かれた。伝統的な交響曲様式のうちにロシア色を豊かに打ち出した作品で、彼自身による「冬の日の幻想」の題のとおり、ロシアの冬の雰囲気を感じさせる作品だ。1874年に改訂されて現行の決定稿が成立した。「未熟な点は多々あるが、のちの成熟した作品よりも優れた点も多く、内容もある」という作曲者の言葉から、彼がこの若き日の交響曲に深い愛着を持っていたことが窺えよう。

第1楽章（アレグロ・トランキロ）は“冬の旅の幻想”と記され、冒頭からロシアの冬の風景が広がるかのよう。第2楽章（アダージョ・カンタービレ・マ・ノン・タント）は“荒涼たる土地、霧の土地”を描く情感に満ちた緩徐楽章。第3楽章（アレグロ・スケルツァンド・ジョコーソ）は旧作のピアノ・ソナタを引用したスケルツォ。第4楽章（アンダンテ・ルグーブレ〜アレグロ・マエストロソ）は民衆歌を用いた序奏の後、活力ある主部が続く。（寺西基之）

交響曲第2番 ハ短調 作品17 「小ロシア」

4/13 東京

1870年代前半、モスクワ音楽院教授を務めていたチャイコフスキーは、バラキレフらの「五人組」との接触から、民族主義的な意識を持つようになっていた。そして、1872年、この交響曲第2番を作曲した。この交響曲のニックネーム（作曲者がつけたものではない）である「小ロシア」は、ロシアから見た「ウクライナ」の呼称（いささか蔑みのニュアンスを含む）である。チャイコフスキーは、妹がウクライナに嫁いでいたために、夏の休暇にはしばしばウクライナを訪れていた。そこでウクライナ民謡に出会い、その影響を受けた。交響曲第2番が「小ロシア」と呼ばれるのは、ウクライナ民謡が用いられているからである。つまり、第1楽章冒頭のホルンの旋律はロシア民謡をウクライナ風に直したものであり、第4楽章の堂々たる序奏のあとの軽快な第1主題はウクライナ民謡から採られたもの。初演は、1873年、モスクワにおいてニコライ・ルビンシテインの指揮で行われた。1879年から80年にかけて作曲者自身による大きな改訂が行われ、現在はその改訂版が演奏されている。（山田治生）

交響曲第3番 ニ長調 作品29 「ポーランド」

4/27 東京

この交響曲第3番は大作「ピアノ協奏曲第1番」を完成させた直後、1875年6月に作曲が開始され、8月にはオーケストレーションが完了した。その後には3大バレエ曲のひとつ『白鳥の湖』が続くが、この時期はチャイコフスキーの創作力が非常に高まっていた時期と言えるだろう。

また、交響曲第3番には他の交響曲にはない特徴がある。それは長調を主調とすること、そして5つの楽章を持つという点である。初演は1875年11月7日（ロシア暦）モスクワで、アントン・ルビンシテインの指揮により行われ、1879年にはアメリカ、ニューヨークで海外初演が行われた。

5つの楽章にはそれぞれイタリア語でタイトルが添えられる。ニ短調の序奏（葬送行進曲）で始まる第1楽章は「序奏とアレグロ」、第2楽章は「アッラ・テデスカ（ドイツ風に）」とされたレントラーによる音楽、第3楽章は「アンダンテ・エレジアール」、第4楽章は「スケルツォ」、第5楽章は「フィナーレ」であり、そこにテンポ・ディ・ポラッカ（ポーランドの民謡ポロネーズのこと）と記されていることから、後に「ポーランド」のサブタイトルが冠された。（片桐卓也）

交響曲第4番 ヘ短調 作品36

2/24 名古屋、4/7 東京

チャイコフスキーが交響曲第4番の作曲を始めたのは1877年の前半だった。彼は、その年の7月にアントニーナ・ミリュコーヴァと結婚したが、その結婚生活はすぐに破綻した。

ナデジダ・フォン・メックとの手紙だけによる「交際」が始まったのは、1876年暮れであった。その年、彼女は、鉄道王であった夫を亡くし、莫大な遺産を相続していた。チャイコフスキーとは文通するだけでなく、次第に彼の創作活動のための経済的援助も行うようになる。

1877年9月、結婚生活の破綻したチャイコフスキーは、フォン・メック夫人からの資金援助をもって、モスクワを離れ、イタリア、スイスへの旅に出た。1878年1月、イタリアのサンレモで交響曲第4番を完成させる。そしてこの交響曲は、彼に自由な創作活動を保証し、結婚生活の危機的状況からの逃避を可能にした「最良の友（つまりフォン・メック夫人）」に献呈された。

第1楽章冒頭にホルンがこの交響曲全体の核となる「運命の動機」を吹奏する。これは第4楽章終盤にも現れるが、最後は民衆の舞踏がこれをかき消し、全曲が締め括られる。（山田治生）

交響曲全曲チクルス

交響曲第5番 ホ短調 作品64

4/13 東京

1878年をはじめに交響曲第4番を完成させ、オペラの傑作『エフゲニー・オネーギン』を書き終えた後、チャイコフスキーは1878年に長年勤めたモスクワ音楽院を退き、スイス、イタリア、フランス、そしてウクライナに滞在して過ごす時期を迎える。その間に作曲された交響曲は1886年に初演された「マンフレッド交響曲」だけで、交響曲という形式からはしばらく遠ざかっていた。1886~88年にかけてのチャイコフスキーの活動を見ると、ヨーロッパ各地への演奏旅行などが目立つ。

1888年にチャイコフスキーはライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団を指揮し、またグリーグ、マーラー、R. シュトラウスなど同時代に活躍した作曲家たちに出会ったことが知られている。そうした出会いが再び交響曲へと関心を向かわせたのかもしれない。チャイコフスキーは同年の5月から8月にかけて、この交響曲第5番を作曲する。

全4楽章で、第3楽章には「ワルツ」を置く。第1楽章の冒頭に出るテーマは「運命の動機」と呼ばれており、それが各楽章に配置されて、作品としての統一感を生み出している。(片桐卓也)

交響曲第6番 ロ短調 作品74「悲愴」

2/24 名古屋、4/27 東京

チャイコフスキーの最後の交響曲となったこの第6番は激烈なまでの悲劇性が打ち出された作品で、ドラマティックな起伏に満ちた第1楽章の暗い性格や、伝統的な様式を逸脱してまで悲痛な緩徐楽章（“ラメントーソ=悲しく、悼んで”と記されている）をフィナーレとした点にそのことがはっきりと現れている。彼自身初演（ロシア暦で1893年10月16日）の指揮をとった僅か9日後に急逝したこともあって、この作品に込められた悲劇的意味合いについて様々な憶測も生れた。悲しみの感情を強烈に訴えかけるような迫真的な表現が聴く人の心を揺さぶる名作である。

第1楽章（アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo）は沈鬱な序奏に始まり、闘争的な主部が発展する。第2楽章（アレグロ・コン・グラツィア）は優美さの中に憂鬱を秘めた5拍子のワルツ。第3楽章（アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）はスケルツォとマーチが結合した楽章。第4楽章（アダージョ・ラメントーソ～アンダンテ）は悲痛な感情に満ちたフィナーレ。死を示すタムタムが響き、最後は息絶えるように終わる。(寺西基之)

交響曲「マンフレッド」 ロ短調 作品58

7/13 東京

イギリスのロマン派詩人バイロンの劇詩「マンフレッド」に基づく標題交響曲で、1885年に作曲された。主人公マンフレッドを示す循環主題を全曲の軸としつつ、物語の情景を交響詩風に劇的に表現した作品である。

かつて恋人アスタルテを死に追いやったことに悩むマンフレッドは精霊に全ての忘却を願うが、その望みは適わず永遠の生命を与えられてしまっている。第1楽章（レント・ルグーブレ）は人生に疲れアルプス山中をさ迷う主人公を描く。冒頭バスクラリネットとファゴットで示される主題がマンフレッドの循環主題。アスタルテ（叙情的な主題）の思い出も彼の心を責めさいなむ。第2楽章（ヴィヴァーチェ・コン・スピーリト）は幻想的なスケルツォで、滝にかかる虹に妖精が現れる。第3楽章（アンダンテ・コン・モート）はアルプスの山人たちの素朴な生活を描く。第4楽章（アレグロ・コン・フオーコ）は山神アリマネスの地下宮殿での霊たちの乱舞が描かれ、そこにマンフレッドが登場、アスタルテの霊が呼び出され、呪いの解けたマンフレッドは最期を迎える。(寺西基之)

ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 作品23

7/13 東京

交響曲第2番と第3番の間に位置する大作が、チャイコフスキーの作品の中で最も有名と言ってもよい「ピアノ協奏曲第1番」だ。チャイコフスキーの親友で、高名なピアニスト、またモスクワ音楽院の院長でもあったニコライ・ルビンシテイン（1835~81）に刺激を受けて1874年の秋に着手された。その年末にはピアノによる草稿が完成し、献呈を考えていたニコライ、及び音楽理論の教授であったグーベルトにそれを聴かせたところ、チャイコフスキーは激しい批難の言葉を浴びせられた。しかし、それに屈せず、オーケストレーションを進めて完成させ、ドイツ人の指揮者、ピアニストであるハンス・フォン・ビューローに献呈した。ビューローはこのピアノ協奏曲を1875年10月25日、アメリカのボストンでベンジャミン・ジョンソン・ラングの指揮のもと初演し、大成功を収めた。その後、ニコライも考えを変え、モスクワ初演の指揮を担当し、自身も独奏ピアノを弾いて、この協奏曲を世の中に広めた。チャイコフスキー自身も初演後この協奏曲を改訂しており、現在演奏されるのは1888年改訂の版である。(片桐卓也)

歌劇『エフゲニー・オネーギン』より「ポロネーズ」

8/30 東京

チャイコフスキーはいくつものオペラを手掛けているが、その中でも特によく知られている傑作が『エフゲニー・オネーギン』である。厭世的な主人公の青年詩人オネーギンと田舎地主の娘タチアーナを主人公としてロシア社会を描いた文豪プーシキンの原作に基づくオペラで、1877-78年に作曲され、1879年に初演された。タチアーナの一途な愛を拒絶したオネーギンが、時を経て公爵夫人として成熟したタチアーナに再会し、今度は彼のほうがタチアーナに求愛するも彼女から拒絶される、という物語が、友人との決闘などの場面を挟みながら展開する。「ポロネーズ」はその第3幕冒頭、ペテルブルクの貴族の舞踏会の場面で演奏される絢爛たる曲。ポロネーズはもともとポーランドの舞曲の曲種で、ヨーロッパ中で愛好され、特にロシアの社交界で盛んに踊られた。(寺西基之)

弦楽セレナード ハ長調 作品48

8/30 東京

これは1880年に祝典序曲「1812年」とほぼ同じ時期に完成した弦楽器のみの5部編成によるセレナーデ(夜曲)で、1ヶ月ほどの短期間で書き上げられた。メック夫人への手紙の中でチャイコフスキーは「自分の内面の衝動に駆られて作曲したので、心のこもったものになりました」と書いている。友人であったチェロ奏者のコンスタンチン・アルブレヒトに献呈されている。

全体は4つの楽章から構成されている。第1楽章に付けられた「ソナチネ形式の小品」という単語は、チャイコフスキーが敬愛したモーツァルトを意識したものだろう。第3楽章と第4楽章は繋げて演奏される。第1楽章は序奏付きだが、その序奏の音楽は第4楽章の最後に再現される。第2楽章は軽快なワルツ。第3楽章は「エレジー」と題された静かな楽章で、その最後の和音から第4楽章につながる。第4楽章はロシア民謡のメロディによる。

1881年の公開初演ではエドゥアルド・ナープラヴニーク(チェコ人の指揮者でロシア在住。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番のロシア初演も指揮)が指揮を担当した。(片桐卓也)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

8/30 東京

1877年、短い結婚生活を終わらせたチャイコフスキーは、イタリア、スイスへの旅に出た。1878年初頭にサンレモで交響曲第4番を完成させた彼は、同年2月に歌劇『エフゲニー・オネーギン』を書き上げ、3月にスイスのレマン湖のほとりでヴァイオリン協奏曲の作曲に取り掛かり、1か月で完成させた。しかし、初演を依頼した、レオポルド・アウアーからは「演奏不可能」という理由で楽譜を突き返されてしまう。結局、3年後にウィーンで初演(アドルフ・ブロッキー独奏、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィル)を実現するもの、当時、最も権威のあった評論家エドゥアルト・ハンスリックからも酷評された。それでも、初演者ブロッキーがこの協奏曲を何度も取り上げ、聴衆も次第に作品の真価を理解するようになっていった。ゆえにこの協奏曲はブロッキーに献呈されている。

第1楽章ではオーケストラによって堂々と奏でられる第1主題が印象的。第2楽章ではチャイコフスキーらしい哀愁に満ちた旋律が聴ける。第3楽章で独奏ヴァイオリンが提示する第1主題は民俗舞曲風。(山田治生)

祝典序曲「1812」 作品49

8/30 東京

祝典序曲「1812年」は、チャイコフスキーの才能をいち早く認めていたピアニストで指揮者のニコライ・ルビンシテインからの依頼に応じて、1812年のナポレオンとの戦争での勝利70周年とモスクワの救世主キリスト大聖堂の建立を記念するために、1880年に作曲された。初演は、1882年、モスクワにおいて、イッポリート・アリターニの指揮によって行われた。

作品は、ナポレオン軍がロシアに攻め入ったものの、寒さと飢えとロシア軍のために敗退していった様を描いている。

曲の冒頭、ロシア正教の聖歌からとられた厳かな旋律がヴィオラとチェロで奏でられる。その後、オーボエ、クラリネット、ホルンによる軍楽隊風の細かな動きの音楽が現れる。金管楽器の吹奏するフランス国歌(「ラ・マルセイエーズ」)とともにナポレオン軍が襲来。それに対抗して、ロシア民謡のような旋律(弦楽器によるレガートなもの「門の前で」と呼ばれる民謡)が現れ、大きなクライマックスが築かれていく(大砲の音まで聞こえる)。最後には帝政ロシアの国歌が引用され、ロシアが大勝利を収める。(山田治生)

小林研一郎 80thの軌跡

読売新聞編集委員 石崎 浩

小林研一郎マエストロは1940年(昭和15年)4月9日、今の福島県いわき市小名浜で生まれた。父親は高校の体育教師で、若いころ陸上競技の百メートル走で福島県代表に選ばれたこともある。マエストロの80代とは信じられないダイナミックな指揮は、父譲りの強靱な体力と運動神経に支えられている。母親も小学校教諭。マエストロは2人きょうだいの長男で、6歳下の妹さんは後に声楽家となった。

幼いころは太平洋戦争のさなかで、米軍の艦砲射撃や空襲におびえる日々。しかしそれが通り過ぎると、どこまでも透き通った海、野山に咲く花々、小鮒が群れをなす小川、夏の夜に飛び交うホタル、手をたたくと舞い上がるイナゴ……豊かな自然のなかで感受性が育まれていった。



幼いころのマエストロ

4歳のとき、近くの小学校にあったピアノで、父親が「月の沙漠」を弾いてくれた。左手の単純な伴奏がやがてアルペジオになると、少年にはそれが天からの声にきこえたという。音楽への憧れが心の中で膨らみ、やがてピアノを習い始めた。

戦争が終わり、10歳のころ。家のラジオからベートーヴェンの「第九」が流れてきた。「メロディーが幾重にもからみ合い、うねり続けながらいつしか奔流となり、光となって合唱の荘嚴な響きがあふれた時、立ってられないような感動と涙で息ができなくなるほどでした」とマエストロは回想する。そして、作曲家になろうと決意した。

生半可なことでは、音楽の道で生きていけない……心配して猛反対していた父親も、中学生



母に抱かれて



高校時代、自作の即興曲を弾く

だが、当時の藝大作曲科はジョン・ケージに代表される前衛音楽が幅をきかせていた。「旋律も和音もない無機質な音楽」だと感じ、やがて、作曲家になることから心が離れていく。前回の東京五輪が開かれた1964年に作曲科を卒業。生活のために、当時増えてきたヤマハ音楽教室でピアノや電子オルガンを教えたり、あちこちのアマチュア合唱団を指導したりして過ごすうち、天啓がひらめく。「指揮の勉強をして、再現芸術の道でやってみるのはどうだろう」。作曲科を卒業してから2年後、同じ藝大の指揮科に入り直した。

指揮科ではまず渡邊暁雄に、次いで山田一雄に師事。クールな指揮ぶりの渡邊と、激しい動きで知られた山田は対照的で、特に山田の指揮に初めて接した時には「情熱を炸裂させるような指揮で心が躍り、脳天に火花が走った」という。日本フィルハーモニー交響楽団の創立指揮者である渡邊からは、後に、手塩にかけて育てた日本フィルを引き継ぐことになる。一方の山田からは、指揮科を卒業した後も親身のレッスンを受け続ける。2人の恩師との温かい交流は、両氏がそれぞれ亡くなるまで続いた。

回り道をして指揮科を卒業した時には、もう30歳が間近になっていた。群馬交響楽団の演奏会で、プログラムの前半だけ振ってデビュー。しだいにオーケストラを指揮する機会が巡ってくるようになる。だが、駆け出しの指揮者にベテランの団員は容赦がない。リハーサルで「おい、わかんないよ、それじゃあ」と罵声を浴びせられたり、足をドンと踏み鳴らされたりして、落ち込むこともしばしばだった。



30歳前後は合唱団の指導などで忙しかった

になった息子が作曲コンクールで特賞を取ったのを機に考えを変え、両親そろって応援してくれるようになった。福島県立磐城高校に進学してからは、千葉県内に住む作曲家の石冨真礼生のもとに、日曜ごとに鈍行に乗って片道8時間もかけて通った。厳しいレッスンに耐えた甲斐があり、高校卒業から1年後、東京藝術大学作曲科に首席で合格した。

1974年、34歳のとき転機が訪れる。音楽コンクールには30歳前後の年齢制限のあるところが多く、もうチャンスがないとあきらめていたところ、ハンガリーで初めて開催されるブダペスト国際指揮者コンクールの年齢制限が35歳までだったのだ。欧州各国の有望な若手がしのぎを削る中、みごと優勝。コンクールはテレビで生中継されていたため、一躍ハンガリー国内で有名人となる。

この優勝を機に、ヨーロッパ各地で指揮をする道が開けた。ブダペストに移り住み、ハンガリー国立交響楽団（現ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団）など各地のオーケストラを指揮。当時の東西ドイツ、イタリア、フランス、オランダなどにも客演した。

特に縁の深いハンガリー国立交響楽団は1923年に創立され、名指揮者フェレンチクに長年率いられた名門。フェレンチクの死後、当時の共産政権はハンガリー人の指揮者を常任に据えようとしていたが、126人の楽員全員が「コバヤシと演奏したい」という嘆願書を国に提出し、当局の案が覆った。1987年から10年間にわたり常任指揮者や音楽総監督を務め、オーケストラが「メリハリ」などの日本語にも機敏に反応するほど、強い絆で結ばれた。チェコ・フィルハーモニー管弦楽団にもたびたび客演し、2002年にはプラハの春音楽祭の開幕コンサートで東洋人として初めてスメタナ「わが祖国」全曲を指揮した。

日本では、とりわけ日本フィルハーモニー交響楽団との関わりが深く、1988年に首席指揮者、90～94年と97～2004年の2度にわたり常任指揮者、その後3年間は音楽監督を務めた（現在は桂冠名誉指揮者）。このほかにも読売日本交響楽団（現特別客演指揮者）、名古屋フィルハーモニー交響楽団（現桂冠指揮者）など多くのオーケストラと信頼関係を築き、今も国内外で精力的に指揮する大車輪の活躍ぶりは、もはや詳しく記すまでもないだろう。その傍ら、2000年から8年間、母校の東京藝術大学指揮科で教授を務め、世界で活躍する山田和樹らを育てた功績も見逃せない。



ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝（1974年）

80歳を過ぎた今でも、長丁場のリハーサルを立ち通して指揮する。声が大きくよく通るので、演奏を細かく止めなくても最後列の金管楽器、打楽器の奏者まで指示が明瞭に聞き取れる。驚異的な記憶力も健在で、長大な交響曲を隅々まで手の内に入れ、暗譜で振り通す。そして何より、指揮台に立つ全身から作品への深い愛情と共感がオーケストラに伝わり、それが魂のこもった響きとなって客席を包み込む。



チェコ・フィルのリハーサル
（2010年4月、オクタヴィア・レコード提供）

「コバケンとその仲間たちオーケストラ」の活動にも触れておきたい。2005年2月、長野県で知的障がいのある人たちによるスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス冬季世界大会」が開かれた際、マエストロと夫人の櫻子さんの呼びかけで結成されたプロ、アマチュア混成のオーケストラだ。世界各国から大会に参加した選手たちを激励する白馬村での第1回演奏会以来、これまで全国各地で74回の演奏会を開き、毎回のように障がいのある人たちを会場に大勢招待してきた。



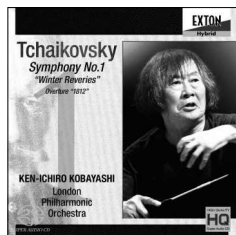
「コバケンとその仲間たちオーケストラ」の福島市公演
（2013年7月15日）

クラシックの演奏会は客席の物音を嫌うため、知的障がいのある人は足を運びにくいこともある。だが、このオケでは遠慮は無用。うれしかったら立ち上がり、感動して声を出してもいい。オケのメンバーにも、視覚などに障がいのある奏者が何人も参加している。障がいがあってもなくても、垣根なく共存できる社会を目指した活動が、どれほど多くの人を勇気づけてきたことだろう。

80代を迎え、ますます輝きを増す小林マエストロ。今後の活躍から目が離せない。

小林研一郎 & ロンドン・フィル チャイコフスキー 交響曲全集

[CD & SACD Hybrid] 定価 各¥2,857(税別) 好評発売中!



交響曲 第1番 「冬の日の幻想」 序曲「1812年」

OVCL-00548

2014年1月8、9日(第1番)、2013年3月2日(1812年) ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



交響曲 第5番 スラヴ行進曲

OVCL-00507

2013年2月24、25日 ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



交響曲 第2番 「小ロシア」 弦楽セレナード

OVCL-00536

2014年1月9、10日(第2番)、2013年3月2日(弦楽セレナード) ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



交響曲 第6番 「悲愴」

幻想序曲「ロメオとジュリエット」

OVCL-00543

2014年1月6、7日 ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



交響曲 第3番

OVCL-00506

2013年2月26-28日 ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



マンフレッド交響曲

OVCL-00540

2014年1月3、4日 ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録



交響曲 第4番 イタリア奇想曲

OVCL-00505

2013年2月28日-3月2日 ロンドンアビー・ロード・スタジオにて収録

Octavia Records

オフィシャル通販サイト

<https://octavia-shop.com>



WEB SHOP 限定15%OFF! ¥5,000以上お買い上げで送料無料

放射線に 係わるすべての 人々に安心を



本 社
東京営業所
大阪営業所
柏崎刈羽営業所
青森営業所
RMC
RMC青森

TECHNOL

CHIYODA TECHNOL CORPORATION

株式会社 千代田テクノル

URL: <https://www.c-technol.co.jp>

e-mail: ctc-master@c-technol.co.jp



Octavia Records Inc.

シゲマツ

創業1917年

働く人々の
健康を守り、
幸福を支える。



富士テレコムができること

課題解決、その先にある価値を
私たちはお客様にとって常に最良最適なものをご提案・ご提供し続けてまいります。



Solution

- ・IPネットワーク
- ・ソリューションビジネス

お困りごとの解決、それ以上のソリューションをご提供します。



Integration

- ・コンサル・分析
- ・システム提案・構築
- ・施工・工事

ビジネスを加速させる最適なシステムをご提案・構築します。



Support

- ・サポートセンター
- ・運用サービス
- ・保守サービス

時代を先読みしたサポートサービスで貴社ビジネスの価値を高めてまいります。



富士テレコム株式会社

<https://www.fujitelecom.co.jp>

〒163-1326

東京都新宿区西新宿六丁目5番1号 新宿アイランドタワー26F

TEL03(3340)6000 FAX03(3340)6011

小林研一郎 80thの軌跡



Ken-ichiro Kobayashi,
Conductor



2019年9月1日(日)サントリーホールで行われたハンガリー放送交響楽団日本公演の様様。
(上皇上皇后陛下のご来席を賜った。)

オービック

新たな企業価値を創造する。

当社は、ERP & クラウドソリューションで、
お客様の経営効果の早期実現を支援します。



株式会社 オービック 東証第1部上場(証券コード:4684)

東京本社 〒104-8328 東京都中央区京橋2-4-15 03(3245)6500

名古屋支店 〒461-0005 名古屋市中区東桜1-13-3 NHK名古屋放送センタービル 052(952)0111

大阪/横浜/京都/福岡/さいたま/松本/静岡/広島